

テ之ヲ校シテ之ヲ録」したとのことであり、『三國名勝圖繪』に拠ったとも見難い。関係がありそうだが未詳として後考を待ちたい。幸侃人質となる（金剛密山勝福寺妙光院善哉坊）

これは『庄内陣記』の増補記事であるが、幸侃の黒い企みを主調音にした『庄内陣記』と、頼俊の同伴を記す『三國名勝圖繪』では基調が全く異なる。

重時が逃る敵を追い討ったこと（柳城）

『庄内陣記』の、重時が逃げる敵を追って三十余人を討ったという記事は増補部であるが、『三國名勝圖繪』よりも具体的である。

村尾・毛利の制止も届かず（大楽）

これも『庄内陣記』の増補記事である。村尾・毛利の二人としてゐる点は『三國名勝圖繪』に一致し、何らかの関係を思わせるが、『三國名勝圖繪』は中原中将坊が飛び出したことを記さないので、これ又関係は未詳として後考を待ちたい。

右のように『庄内陣記』と『三國名勝圖繪』は資料的近さがうかがわれるが、直接の関係は詳にし得なかった。

（注一）『研究年報』第十三号（昭和六〇年三月）に翻刻した。

（注二）この本の『日州庄内軍記』（零本）に重なる部分は（注一）の翻刻に、校異という形で関係を示した。猶、この本に問題があるかもしれないことを拙稿「『庄内軍記』をめぐって」（『研究年報』第

十五号、昭和六二年三月）で指摘した。

（注三）拙稿「玉里文庫本『庄内陣記』の性格等」（『研究年報』第十四号、昭和六一年三月）参照。

『薩藩名勝志』を見せて頂いた鹿児島県立図書館に感謝の意を表する。

（一九八八年一月八日受理）

襲ひ槻野の砦を破る久高兵を還して是を逐ふ

(注) 前出。

三

『庄内陣記』成立以後に未だ残つてゐた資料や伝承を集めたものに鹿児島県立図書館蔵二巻本の「拾遺」に付けられてゐる「補遺」(いつ付けられたか詳にし得ないが、一応)、『庄内陣記』の朱や墨の書き込み等があるが、『薩藩名勝志』『三國名勝圖繪』に記されてゐる記事にはそれらに収められてゐないものも少くない。特に印象に残つてゐるものを挙げると、白馬山権現を始めとする神社への戦勝祈願、『三國名勝圖繪』に記されてゐた、庄内への魚塩を絶つたこと(都城)、兼持の軍功(麥生田城)、忠棟が検地に立ち合つてゐたこと(隼人城)、女性が伏見の変を忠真に告げたということ(大河原山)、讃良が忠真方の援軍を待ち伏せしてゐたということ(龍虎城)、平田の朝功(同)等がある。これらの中には、先の二点の記事と共に、庄内軍記を更に改訂させるような魅力をもつたものも(史実としての価値の問題もあろうが)あるのではないかと思ふ。

『三國名勝圖繪』を繙けば、庄内の乱は二百年以上経つて猶、旧薩摩藩の人々の大きな関心事だつたことが窺われる。それは勿論編著者の好みが出来た現象でもあるが、しかし、それだけに止らない、例えば庄内軍記の盛行がその編著者を動かしたといったこともあつたのではないかと考える。そして、『三國名勝圖繪』が刊行されれば、今度はその記事が話題になつて、人々の関心、調査欲を掻き立てたのではないか。従つ

て、幕末の旧薩摩藩では庄内の乱はあたかも乱直後のように人々の周囲に甦つていたように見える。

最後に『三國名勝圖繪』と庄内軍記諸本との関係を見ておきたい。

『三國名勝圖繪』が合戦記事などを二巻本に仰いでゐることは「平田三五郎墓」などに注した。編著者から見た代表的な庄内軍記は『庄内軍記』と二巻本、特にその後者なのであろう。初期本だけに関する記事は、忠恒が真幸を経由して東霧島に向かつたということだけであり、参照されたかどうかもはっきりしない。問題は『庄内陣記』との関係であるが次に、この問題について、『庄内陣記』とだけ共通する記事を挙げて、調べておきたい。

三州検地(隼人城)

『庄内陣記』の三州検地は二巻本の「拾遺」に引かれてゐる『世禄記』の記事を他の資料によつて改訂し、詳しくしたものと思われる。『三國名勝圖繪』のものは「大音新介」を竿取りの代表的な人物とする点で、「拾遺」又は『世禄記』に近い。

富山石見、重信越後の勢(龍虎城)

『庄内陣記』の石見射殺の処は二巻本の表現を改訂したものと見られるが、重信の処は増補部分である。「富山石見」石見ニ瀬戸三百人ヲ従へ郷ヶ迫ニ打テ出」の表現は部分的ながら『三國名勝圖繪』に極めて近い。ただし、讃良が石見を待ち伏せしてゐたのかなど財部合戦全体の状況、流れが全く異なる。又『庄内陣記』は「諸家ノ覚書等ヲ纂

度も亦打散されて這々城にそ逃ける（二卷本）

森田御營 慈眼公の御營所なり其南に入来院重時長壽院盛淳島津忠豊等の營址あり

（注）五日太守忠恒公森田ニ御陣ヲ被移御陣ノ南ハ入来院又六重時ノ陣也北ハ阿多長壽院ノ陣ナリ次ハ島津中務少輔忠豊ノ陣ナリ（『莊内軍記』、『莊内軍記』及び、二卷本だけ）。

茶園ケ尾 北郷氏が營址なり

（注）其次茶園ケ尾ハ北郷長千代丸ノ陣ナリ（『莊内軍記』だけ）。

天神ケ尾 島津右馬頭征久の營址なり

（注）天神ケ尾ハ島津右馬頭征久ノ陣也（『莊内軍記』、『莊内軍記』及び二卷本だけ）。

豊後營 忠眞が乱に寺澤志摩守太田飛驒守高橋右近秋月長門守等諸援將の營所なりといふ

（注）扱而京陣に相并て豊後方の援兵等陣取て扣へたり此皆寺沢志摩守大田高橋秋月氏の備を設くる所なり（二卷本）。

京營 山口勘兵衛直友東照宮の旨を受て來り留る是直友が營所ならんといへり凡此諸營所敵城と相距ること甚近し毎日互に鐵砲を相放てりとぞ

（注）次ハ豊後陣京陣也（『莊内軍記』）。

梶山城 伊集院忠眞叛せし時其將野邊彦一同金左衛門谷口丹波同伊豫此を守る

（注）梶山には野邊彦市息金左衛門谷口丹波同伊豫（庄内軍記）

松山

松尾城 慶長四年伊集院忠眞謀叛の時柏原周防守公盛當城を守る六月忠

眞が將日高靜鎮中村吉右衛門偽て當城を攻む此時樺山久高志布志を守る松山の寡兵なるを聞て兵を遣して赴き救ふ靜鎮吉右衛門兵を移して志布志に趨き梶野望を襲て是を破る又當城を攻む鳥銃を發して戰を挑む公盛城に嬰て固く守る公盛が兵士木脇喜兵衛鳥銃を善くす敵を殺すこと多し敵軍是に恐れて引去るといふ

（注）志布志は樺山樵左衛門久高松山ニは柏原將監（『庄内軍記』）。七月三日忠真か臣日高靜鎮中村吉右衛門尉軍兵を引具して松山の城に向て鉄砲を放ち掛攻寄せんとする支度なり故に志布志より軍兵を分て松山城に加勢せり然処に敵の軍勢慮らざるに引違て志布志の月野を攻破り一戰に勝利を得て速に引退く……松山の城中には木脇喜兵衛某鉄砲の達人にて敵を射る事多き故此に恐れて敵の勢左右なく近付得さりしとぞ（二卷本）。

卷之六十

志布志

松尾城 伊集院忠眞叛せし時樺山久高松尾城を守れり

（注）前出。

梶野村古戰場 伊集院忠眞謀叛の時慶長四年七月三日忠眞が將松山を侵さんとす樺山久高兵を遣して松山を救ふ敵其虚を知り却て志布志を

(注) 九月拾日東霧島陳北郷家臣……都之城近邊宮丸村指過紫尾田德益在郷被放火候処從都城大将忠真人数引率安永小松ケ尾之引取鉄炮取合……敵見之追翔処北郷喜左衛門軍衆三百人引具……放火人数え致助力從其小松ケ尾引取安永鶴島ニ小杉丹後北郷喜左衛門同備也……忠真早速安永今平如都之城本丸引退なり(『庄内軍記』)。太守忠恒公山田城ヲ御進發有リ御馬ヲ野之三谷乗満寺ノ原ニ立ラレ北郷作左衛門三久ニ先陣ヲ被仰付三久引卒北郷勢大根田ノ邊ニ備へ……北郷勢小松ケ尾ニ支テ合戦ス……時ニ忠真カ大勢乗勝北郷陣備乱ントス……此時安永ノ城ヨリ多勢打出欲要北郷陣之後……然處ニ島津中務少輔忠豐安永ノ城ノ押ヘトシテ多勢ヲ引率シテ打出ラル安永ノ勢是ヲ見テ城中ニ引退キ一騎モ打テ出ルハナシ……上井仲五長壽院肝付半兵衛敷根仲兵衛河田大膳野之三谷ノ城ノ搦手ノ大将トシテ兵ヲ被出仲五卒多勢小谷頭ニ被扣時ニ野之三谷ノ城ノ援ケトシテ梶山勝岡ノ城ヨリ多勢馳來テ仲五ノ兵ト合戦ス……敵乗勝處ニ三久卒多勢鶴ノ嶋ヨリ馳來テ敵ノ陣ヲ横撃シ大ニ是ヲ攻破ル高城ノ城主比志嶋彦太郎卒援兵河ヲ渡シ釈迦堂原ニ馳來ル然リト云トモ三久ノ横入ニ恐レ一軍モセス又河ヲ渡シ高城ヘ逃歸ル梶山勝岡ノ勢モ亦金田ノコトク引退ク北郷勢乗費欲攻野之三谷ノ城勇ミ進テ……時ニ味方一同ニ進テ外郭ヲ破リ本城ニ責入り鈕頭ニ火ヲ散シテ合戦ス敵ヲ討コト不知數(『庄内軍記』)。

志和池城 伊集院忠真叛きし時其將伊集院掃部助守る慶長四年八月北郷氏が軍志和池城を攻め城外に戦ふ十月二日慈眼公軍を進めて志和池城を攻め山田城より移て森田に屯し軍を進て志和池城を攻む其粮道を絶つ又望楼を城西に設く十六日高城の軍森田營に薄り鉄砲を放つ我兵共に是を逐ふ高木村に戦て是を破る十二月四日志和池城の四面に於て木を結て柵とし内外を隔断す五年正月四日忠真粮を志和池城に送る夜木柵を壊て入る我是を逐ふ賊兵糧を棄て城中に入る城中愈困む十六日志和池城兵を出して挑み戦ふ我軍撃て是を破る志和池城圍まること累月城中食盡て二月五日將士潰散す

(注) 志和池ニハ伊集院掃部助……八月十五日東霧島之陣北郷手北郷喜左衛門……志和池之内丸谷楠牟禮所ヘ構伏兵志和池敵餘多討取……十月五日從守護方北郷手志和池之内茶園ケ尾森田天神ケ尾御陣付給……間近依構城櫓城目下見矢差間明依鉄炮射込志和池之城三方陸地ニ陣着前一方大河流故困窮之至也……十一月十六日志和池之城間之垣從守護方北郷方暫時之間ニ束竹立廻其外戸結構虎落垣渥堀大溝乱櫓逆も木曳立大勢ヲ以困籠……依之忠真居城鷹之尾ニ而人数集令相談……差懸志和池間之垣之处ニ此事洩聞森田御陳從守護方出軍兵故伊集院新右衛門不及防戦三百余人志和池之逃籠なり弥籠城飢饉ニ成(『庄内軍記』)。衆皆此儀ニ一同シテ同年二月六日遂ニ下城ヲソシタリケル(『庄内軍記』)。同月十六日城中の兵打出たり待設けたる寄手の勢なしかはもつてかけさるへき……此

諏訪山風呂谷 我軍士曾山次十郎時に年十六容貌絶麗にして名を知らざる者なし此日風呂谷上に戦死す爾軍愛惜せざる者なし死骸を埋といへども香氣五日に至て猶薫ずといへり今に其墓あり新納忠元次十郎が戦死せしを詠ずる歌あり人口に膾炙す 昨日まで誰が手枕に乱れけん よもぎが本にかゝる黒髪

(注) 富山次十郎と云る少年二八計りと打見へて容顔ことに美麗なるが……風呂谷の上にして敵の放てる鉄砲にあへなくも射通され……新納武蔵入道拙斎は彼少人の戦死を聞哀悼の思ひに堪ず斯こそ詠じ給ひける きのふまで誰手枕に乱けん蓬が本にかゝる黒髪 斯て死骸を収るといゑとも蘭麝の匂ひ消やられて日数程ふる浅茅原風や薫ると怪まる(二巻本だけ)。

山田城 伊集院忠真叛きし時其将長崎休兵衛此を守る慶長四年六月廿三日島津忠豊新納忠元村尾松清入院重時等兵を引て當城を攻む攻戦卯より午に至る城兵忠豊の旗を奪て城上に立つ衆軍以為く忠豊先登すと先を争て攻めしに城忽ち陥る守将長崎休兵衛加番中村與左衛門を斬り三百餘人を殺す既にして九月晦日慈眼公高城東霧島より移て當城に營し玉ふ

(注) 山田には長崎治部息久兵衛中村与左衛門……同廿五日山田城責なり大将嶋津中務少輔忠豊……新納武蔵守忠元……村尾入道松清……搦手之大将入来院又六重時卯之刻ニ合戦初午之刻終城無難責落……山田之城主長崎休兵衛中村与左衛門残軍兵貳百三拾人打死

(『莊内軍記』)。同月廿三日……島津中書軍勢ヲ進メテ大手ヨリ攻ラル時二城中ヨリ兵ヲ出シ旗ヲ奪取り城中ニソ立タリケル寄手ノ勢見之ハヤ中書コソ城ヲ乗取ラレシソ續ケヤ人々トテ我劣シト四方ヨリ攻入(『莊内軍記』)。

野々美谷城 伊集院忠真叛逆の時其将有屋田大炊左衛門此を守る有屋田戦死の後古垣與兵衛守将たり

(注) 野々三谷ニハ有屋田大炊左衛門古垣從齋息与兵衛……於伊東原野々三谷城主有屋田大炊左衛門戦死……於野之三谷搦手口城主古垣与兵衛と北郷手小杉丹後名乗合鍵合ス(『莊内軍記』)

十萬寺原 伊集院忠真が乱に慶長四年九月十日慈眼公諸軍を將ゐて十萬寺原に軍だちす北郷作左衛門三久先鋒となる祁答院の軍を引て大根田十萬寺原より末の方一里許に陣す平田増宗乙房丸を攻め戦ひ勝て還る三久輕卒を遣して柴尾田德益十萬寺原より午方一里餘を焼く都城兵を出して追ふ小松ケ尾に戦て利あらず北郷喜左衛門尉久陸兵を率て來り救ふ都城の兵退き去る祁答院の軍去て鶴島十萬寺原より申方十三町許に陣す野々美谷安永兵を出して後軍を襲んとす梶山勝岡又兵を出して來り戦ふ島津忠豊安永の敵を撃て退く川田大膳亮上井仲五兼政肝付伴兵衛尉兼篤長壽院敷根頼豊等野々美谷梶山勝岡の兵と小谷頭に戦ふ祁答院の兵三城の兵を横に撃て是を破る曾比志島彦四郎高城の兵を引て來り救ふ三久釋迦堂原に上り又横に撃て是を破る野々美谷梶山の軍各其城に向て遁れ走る三久勝に乗じて野々美谷城の搦手に入り外城を破て還る首を斬ること八千餘

れることを得たり因て湯田八幡を勤請す

(注) 湯田八幡宮のことは庄内軍記に載せない。

松林山成就院天長寺 文祿四年北郷氏宮之城に移封せられしに依り當寺を其城東に移す北郷忠能當封に復する時又當寺を今の地に移し建つ

(注) 庄内軍記に載せない。

天満神社 伊集院幸侃當邑を領するや天長寺を宮丸村松本に建て祈願所とす時に天満宮を彼地に同じく遷さんとし歩卒をして昇がしめしかども進まず数百人を増加せしかども進まざること故の如し因て社を毀ちて是を移す其後北郷忠能當邑に封を復せられ天満宮を今の地に移す時に百人に足らずして移すことを得たりといふ

(注) 庄内軍記に載せない。

長城山龍峰寺 北郷氏宮之城に移封の時當寺を彼地に移す其後復封に及で又今の地に遷す

(注) 庄内軍記に載せない。

卷之五十九

都城之二

梅北城 伊集院忠真叛逆の時其將日置善左衛門同覺内澁谷仲左衛門守る

(注) 梅北は日置善左衛門息覺内澁谷仲左衛門(『庄内軍記』)。

安永城 伊集院忠真叛せし時其將伊集院五兵衛中山平太夫白石永仙守る

慶長四年十二月八日白石永仙兵を中霧島諏訪山風呂谷枳ヶ谷に伏し輕卒を率ゐ山田城に向ひ鉄炮を發して戦を挑む種子島の軍二百人出

撃つ敵伴り走る追て諏訪山に至る中霧島の伏起る我兵利あらず又安永城中薪を積み火を放つ煙焰空を蔽ふ我森田の軍營望見て以為く安永城陥ると軍兵争ひ出て安永に赴く大迫安永城の東北五町許を越に及て諏訪山風呂谷枳ヶ谷の伏兵起り城兵出戦ふ我軍利あらず中霧島に向て退く敵追尾す裨將頼娃彌一郎兵を率て來り救ひ敵を退く

(注) 安永は伊集院五兵衛白石永仙中山平太夫(『庄内軍記』)。十二月八日忠真方白石永仙安永ノ城ヨリ釣勢ヲ引具シ山田ノ城ニ向テ山田城ノ御番手勢ノ中種子島家ノ勢打出敵ヲ追テ諏訪山近辺ニ到ノ時中霧島山ノ伏兵ヲ起シ面ケ田ノ深田ニ追入大古川マテ追詰以上百餘人討取ケリ同日白石永仙謀ニ金石ノ城ニ積茅竹天ヲ焦シテ焼立タリ森田御陣ヨリ是ヲ見テ御旗本ノ勢安永ノ城ニ向ントス……勇ミ進テ大迫ヲ越涯マテ被寄ケリ時諏訪山風呂谷ノ伏兵五百人枳ヶ谷ノ伏兵五百人一度ニ起シ合城中ヨリモ打出タリ依之御方ノ勢大迫ニ引退彼大迫ハ古江中霧島ニ通ル路ヨリ外ハ人馬ノ通融無リケレハ敵三方ヨリ寄來テ彼ノ難處ニ追詰五百餘人ヲ討トリケリ……此時頼娃弥一郎其勢二百余人必死ヲ紛シテ防戦ヒ敵数多討取り名譽ヲソ拳ラレケル(『庄内軍記』)。永仙が足輕を率いて來たこと、種子島勢が二百人だったことは『庄内軍記』にある。

中霧島 敵より伏兵を所置なり安永城を距ること丑の方十町許事蹟前文に見ゆ

(注) 前出。

將比志島式部少輔小牟田清五左衛門等が守れる高城を高城邑月山攻んが
為寶光山に高城邑大井手村にあり田原の上より申方三十餘町軍し麥を刈らしむ城兵突出して田原に此即ち田原なり戦ふ我軍撃て是を敗る北るを追て修善寺の此寺山之口村にあり田原之上より耶方行程十二町餘門外
に至る城兵來り援ふ是に於て軍を収むと見えたり又一書には公の將
北郷三久兵を田原の上に屯し戦ひあり修善寺の住僧春朝坊等出て我
軍に力を協せ大に奮戦せしを記す

(注) 北郷勢は山之口八ヶ所田原門上へ備(『庄内軍記』)。城中よりも打
て出敵味方入交りて合戦時をそ移しける……修善寺の住僧権少僧
都春朝坊は(二卷本)。庄内軍記は修善寺の住僧を忠真方として描
く。

勝岡

豐鷹丸城 慶長四年伊集院忠真叛せし時忠真が十二畧の中にて伊集院如
辰朝倉十助中俣玄蕃をして守らしめし所なり……翌五年二月忠真降
を乞ひ諸將に命じて降らしむ是におひて如辰等出て降れり

(注) 勝岡ニハ伊集院恕辰朝倉拾助中俣玄番……二月廿九日梶山勝岡山
之口此三城……城受取也(『庄内軍記』)。

卷之五十八

都城

島津稻荷宮 當社は得佛公此地祝吉御所に在し時建立して家神とせらる
山田聖榮日記
等其事を載す社説初め得佛公摂州住吉社邊にて生れ玉ひし時住吉末社稻荷
明神の擁護あり故に公稻荷明神を崇仰す建久八年公山門院より島津

に移り祝吉御所に居る因て是歳九月七日當社を創建し十九日勤請の
儀を行はる……慶長五年三月十五日伊集院忠真都城を以て下る是日
貫明公慈眼公都城に入る其翌日兩公當社に御参詣あり太刀神馬を寄
進し玉ふ是忠真降伏の御結願なりしとぞ

(注) 翌れは三月十六日龍伯公忠恒公島戸の稻荷に御参詣あり……是は
逆徒退散の御結願と承る……まさに御高祖忠久公京都より輔佐し
来て造立し給ふ処にして御當家守護の靈社とかや……往昔御元祖
忠久公摂州住吉の原にて御誕生ありしとき……狐は稻荷の化身な
れは此則當社守護の瑞現なりとて稻荷を殊に信ぜらる……其後又
日向方島津御庄に徙らせ給ひ此所に御館を構へ祝吉の御所と号し
て忠久主御座す稻荷は守護神なれはとて御下向の折ふし京師より
輔佐し来て同しく鳴津の御庄内に宮居造立まし……て永く當家の
守護神とならせ給へと御祈誓あり如在の礼莫怠りなく御崇仰あり
しとかや此則建久八年九月七日に柱立して工匠不日に功成て同月
十九日御遷宮ましき(二卷本だけ)。

今房霧島權現社 伊集院幸侃當邑を領するに及で漸く頽廢す
(注) 庄内軍記に載せない。

湯田八幡宮 都城主北郷時久伊集院幸侃が謀計に由て宮之城に移さ
れしが舊封の地に復せられんことを思て朝夕忘れず因て是を宮之城
湯田村の八幡に誓願をなす其後伊集院忠真叛し時久が孫長千代丸忠
能軍を率ゐて都城を從征す忠真降伏するに及んで忠能舊封に復せら

とを警む是戦果して其言の如し

(注) 十月十六日曉高城之敵取副城主小牟田清五左衛門為釣野伏大将人

数五十余人引具高木村え致野伏森田之御陳所近邊追軍兵廿余人蒐鉄炮陣中え打籠從御陳所大勢追掛出高木合戦釣手軍兵從高木向小山逃味方弥乘勝追翔るニ高木大楽圭追詰時……高木城中より大将蒐出於大楽ニ合戦味方敗軍釣手大将小牟田清五左衛門小山於古川北郷方友重拾郎兵衛川野七兵衛谷口孫左衛門射取(『庄内軍記』)。御陣ノ勢北郷勢川ヲ渡シ……安和井カ塚ノ伏兵ヲ起シ……北郷方友重十郎左衛門討取ケリ(『莊内軍記』)。十五日の夜に入て村尾入道笑清忠長入道紹益に向て云く河より東の竹の林に敵の野伏有りと見へたり……忠長入道意得たりとて彼方に敵の出たりとも味方の勢一人も打出ることあるべからずと陣中を触られしに……時に村尾笑清は敵の後に駈廻りて大に伐て勝利を得……強敵の氣を挫く……十五日の夜の宿り鳩夥しく飛列て味方の陣に移り来れり其外田の面の水鳥も多く飛来る体を見れば敵の野伏に疑ひなし(二卷本)。此ヲ見テ村尾松清毛利寛右衛門尉ハ敵伏兵ヲ置テ味方勢ヲ偽引出シ討取ントス敵ノ行ニ乗テ猥ニ追ヘカラズト制スレトモ……平田太郎左衛門増宗中原中将坊忍ラレカネテ(『庄内陣記』)

阿和井ヶ塚

小山川原 以上二條事蹟前文に見ゆ

(注) 前出。

寶光 庄内の役に慈眼公屯營の處なり事は前條月山日和城に詳なり

(注) 前出。

東霧島御陣營 伊集院忠眞謀叛の時慶長四年六月上旬慈眼公師を督して鹿兒府を發し菱刈眞幸を歴て東霧島勅詔院を本營とす初忠眞が兵是を守る是に至て遁れ去る諸將の大兵本營の四方を守る既にして公山田城城郡を攻て是を抜く因て山田城に移り北郷長千代丸をして東霧島を守らしむ

(注) 慶長四年己亥六月上旬少將忠恒公鹿兒島御出馬……眞幸之院御打通……東霧嶋へ為籠居敵追散御陣ニ籠人々者先……忠恒公士卒召列山田之城え罷成乗移候北郷方東霧嶋之御陣番相勤候(『庄内軍記』。眞幸を通つたことを記すのは『庄内軍記』及び『日州庄内軍記』だけ。東霧島の敵を追散らしたことを記すのは『庄内陣記』も)。

山之口

山之口古城 慶長四年内寇伊集院忠眞が庄内十二壘の中にて其臣倉野七兵衛樗木主水等是を守れり當時壕を浚し柵を構ふ五年忠眞降を乞ひ諸將に命じて速に降らしむ是に於て當城も亦降る倉野七兵衛は先是戦死す高崎柳城に見ゆ

(注) 山之口には倉野七兵衛樗木主水……二月廿九日梶山勝岡山之口此三城……城受取也(『庄内軍記』)。城普請のことは庄内軍記に載せない。

田原之上 山之口村にあり慶長五年二月十四日慈眼公叛賊伊集院忠眞が

柳城 慶長四年庄内伊集院忠眞征伐の時哨堡たりしと云ふ舊記を按ずる

には役入來院重時はを成り繩瀬に關を建て兵を置く六月賊倉野七兵衛山之口軍を率し東霧島を襲んとす星原河内田

衛城守將星原河内田

東霧島は高城の別地にて慈眼公の御本營是にあり御本營は高城に載す

尻を経て繩瀬川を渡り關を破て水湧に至る重時兵を分ち天神山と迫戸に伏す倉野が軍來る重時迫戸の伏を起して前を遮り天神山の伏をして其後を撃つ於是衆却て寡に圍まれ死する者数を知らず倉野も亦鳥銃に中て死す賊潰へ乱る重時逃るを追ひ數十人を斬て歸る

(注)日州高原之内繩瀬ニ從守護方構關所を入來院又六重時之軍勢警固而

罷在所を敵山之口城主倉野七兵衛右關所打破直ニ東霧島之陣に逆

戸ニ攻入北郷勢為討亡評儀ニ而大勢引率山之口石山之後成星原筋

打通繩瀬走渡責と水涌歌之風情ニテ進懸關所え攻入番衆小勢なり

(『庄内軍記』)。倉野力勢ノ寄ルノヨシ番所ニ聞ヘケレハ向ナル天

神山ニ伏兵ヲ置在番ノ勢ハ迫戸ニ備テ待居タリ如案倉野力多勢迫

戸ニ到ル時分ヲ見テ天神山ノ伏兵ト在番ノ軍兵ト同時ニ関ヲ揚テ

前後ヨリ取圍ミ縱横無盡ニ防戦フ……在番ノ勢ノ内丹波ノ某鉄炮

ニテ七兵衛ヲ射殺セリ(『庄内軍記』)。是モリ寄手氣ヲ撓テ立足モ

ナク敗北シテ這々山之口へ逃歸ル繩瀬ノ渡迫追打テ三十余人打取

(『庄内陣記』)。

繩瀬關 前文に見ゆ

(注) 前出。

高城

東霧島山金剛佛作寺勅詔院 當寺は慈眼公伊集院忠眞御征伐の時曾て御

本營となし玉へり

(注) 少將忠恒公……日州東霧嶋金剛佛作寺御陣ニ御取(『庄内軍記』)。

月山日和城 慶長四年伊集院忠眞庄内を以て叛す其將比志島式部少輔義

智入道して清庵と號す伊集院幸佩弟比志島彦太郎比志島久次郎小牟田清五左衛門高城を

守る城兵出て我軍と處々に争戦す五年二月十四日慈眼公高城に來

り寶光に屯し麥を刈しむ城兵突出して田原田原は山之口邑に屬すに戦ふ我軍撃て

是を敗る北るを追て修禪寺の門外に至る此寺も山之口邑にあり

(注) 高城ニは比志嶋清安息彦四郎同久次郎小牟田清五左衛門……麦作

取ニ出人数守護方勢者高城之内小山寶光之備……從山之口城敵出

合鉄炮取合山之口之城口修善寺まで追籠敵討捕(『庄内軍記』)。息

彦太郎……北郷勢ハ山之口田原門ノ邊ニソ備ケル(『庄内軍記』)。

大樂 其後伊集院忠眞謀叛の時慶長四年十月十六日高城守將小牟田清五

左衛門兵を率ひ高木の川流に至り森田の御本營に向て鳥銃を連發す

高木森田並に郡城に在り平田増宗及び北郷氏の軍川を渡て是を逐ふ村尾松清毛利覺右

衛門等はを止れども聴ず小牟田且戦且走る小山川原をすぎ大樂に至

る伏兵阿和井冢と小山川原の邊に起り比志島清庵高城より出て撃つ

我軍利あらず森田の軍來り救ひ敵の前を撃ち村尾松清部兵を以て敵

の軍後を撃つ敵兵潰ゆ戦ひの半に北郷が兵友重十郎右衛門敵將小牟

田を小山川原に撃殺す此前夜村尾松清島津忠長に告て日川東の竹林

に伏兵あらん宿鳩水禽盡く飛去ると忠長陣中に令して兵を發するこ

蓬來山天福寺 當寺は勢州桑名城主松平定行夫人の創建なり初め松齡公

御女子虚窓翁主名は伊集院忠眞に降嫁し給ひて一女を生ず即ち定行

の夫人なり元和三年定行に嫁す其後生父忠眞菩提の為に當寺を開基して所領を寄進し親から一通の書を作て當寺に遺し藏めしむ

(注)庄内軍記に載せない。

卷之四十七

新城

松尾城 文禄中伊集院右衛門太夫忠棟領す

(注)庄内軍記に載せない。

鹿屋

鹿屋市 此互市古より今に至りて絶ず其始は伊集院忠棟當郷を所領の時

より起るといひ傳へり

(注)庄内軍記に載せない。

龜鶴城 伊集院右衛門太夫忠棟修築せしといひ傳ふ……肝付氏衰て後伊

集院忠棟所領となれり

(注)庄内軍記に載せない。

卷之五十三

飯野

白鳥權現社 慶長五年正月二十一日慈眼公又神領百四十三石五斗餘を寄

進し永世丁役を免ぜらる是日州莊内の役に公の誓願あるに因てなり

(注)『薩藩名勝志』に前出。

卷之五十四

野尻

弔躍 慶長七年壬寅八月十七日伊集院源次郎忠眞を當邑麓村に誅す爾後毎年其日其村に炎災あり土民以謂らく忠眞怨靈の致すところならんと

(注)慶長七年八月十七日……右之御狩戻ニ於野尻忠眞ヲ穆佐衆中鷲川

治右衛門淵脇平馬待請以鉄炮射殺(『庄内軍記』)。

卷之五十五

高岡

金剛密山勝福寺妙光院善哉坊 天正十五年豊關白の軍日州に入るや頼俊敵營に至て和を議す伊集院幸侃出て質たる時も頼俊同伴す貫明公寶刀を賜ふて賞す

(注)忠棟遮テ降和ヲ勸メ奉り剩へ先達テ除髪シテ号齋名ヲ幸侃ト自身真先ニ秀長ノ本陣ニ為人質參向シ(『庄内陣記』)。頼俊のことは庄内軍記に載せない。

總陣 天正十五年豊關白西侵の時日州路の大將大和大納言秀長營址なり

といふ

(注)大將羽柴美濃守秀長秀吉公御舍弟大和大納言と云……天正十五年四月十八日日向口より打入せ給ふ(『庄内軍記』。『莊内軍記』及び、二卷本にはない)。

卷之五十七

高崎

彼の死骸を負ひ退きしに三五郎是を見て號泣し謂く我生死を共にせんと約せしとて遂に敵陣に馳入て戦死す時に生年十六歳と見えたり此戦ひ前の龍虎城に載す併せ考ふべし人皆無官大夫敦盛の戦死と思ひ合せて悲涙を催す三五郎が事は本府俠少年の徒知らざる者なくして常に悲歌慷慨の談柄とせり

(注)引用の庄内軍記は二巻本である。

宮内式部左衛門墓 平田三五郎墓より西の方一町許にあり墓銘慶長四年六月廿七日と記す式部左衛門陣没は三五郎と同日の合戦なり

(注)庄内軍記(二巻本以下)は治部とする。

吉田大藏清家墓 三五郎墓より申の方一町許の所にありしに深谷の邊にて土崩れ今は墓所なし清家戦死も三五郎戦死と同日なり

とあれば戦場にて即時に死たりともいひがたし平田利左衛門口上書には吉田大藏殿など同前戦死之由傳承と見ゆ然れば手負にて陣屋にて死せし歟

實明公御書の内吉田大藏は手負云々

(注)前出

卷之三十六

末吉

龜鶴城 文祿四年伊集院右衛門太夫忠棟都城へ移封せられ當邑を領す慶長四年忠棟子源次郎忠眞叛逆の時其將當城を守る九月八日島津圖書頭忠長樺山權左衛門久高柏原將監兵を率て當城を攻む城兵拒戦ふ三將奮戦して是を破る敗卒城に入て固く守る同五年三月忠眞降る太守公吉利奎右衛門肝屬半兵衛敷根仲兵衛河田大膳亮に命じ當城に入て是を交領らしむ

(注)右三將末吉之城へ發向城内え鉄炮打込城之軍兵不墓々……三月九日末吉之城ハ肝付半兵衛吉利奎右衛門敷根仲兵衛川田大膳城受取也(『庄内軍記』)。庄内軍記は恒吉城を落とした記事に続けてみて、九月八日としない。

恒吉

日輪城 既にして伊集院幸侃が所領となる慶長四年幸侃が子忠眞叛し伊集院宗左衛門をして當城を守らしむ七月我軍當城を攻て是を抜く賊將宗左衛門都城に奔る

(注)伊集院宗左衛門を初軍勢被敗北翌廿五日恒吉之城打捨都之城へ逃籠なり(『庄内軍記』)。「薩藩名勝志」に出る。

市成

垂野城 其後島津征久伊集院幸侃等の所領となる

(注)庄内軍記に載せない。

卷之三十七

加治木

加治木城 兼寛子なし伊集院幸侃が第三男三郎五郎兼三を後とす以安より兼三に至り四世相續ひて城主たり……同年十月廿六日兼三を薩州喜久に移し封ず

(注)庄内軍記に載せない。

卷之三十八

帖佐

澤田大明神社 慶長四年庄内乱の時貫明公慈眼公御立願の旨ありて慶長六年神領二十石餘を寄附し玉ふといふ

(注)庄内軍記に載せない。

龍虎城 伊集院忠真叛逆の時其將伊集院甚吉甚吉は後藏人と號す幸佩の甥なり猿渡肥前當城を

守る慶長四年我軍當城を攻む守將甚吉援を都城に求む忠真重信越後

富山石見一本瀬戸口に石見に作るに兵七百を率て赴き救はしむ石見は三百人を督して

郷ヶ迫へ出越後は五百人を領して古井原に向て拒ぎ戦ふ時に甚吉は病ありて出づといふ我

將山田越前守有信謀て讃良善助に三百人を率ひて日光神山に伏せし

む石見至る伏兵起り且左右の山より銃を亂發して奮戦し善助銃を以

て石見を射殺す賊兵敗走す我軍追撃して歸る古井原にても我軍重信

越後と戦あり吉田大藏平田三五郎宮内式部左衛門等戦死す貫明公よ

り松齡公へ遣さる御書翰に財部口に人数を出せしに敵固く拒ぎ戦ふ

我軍奮闘して功あり我兵にて平田三五郎朝たには斬獲の功ありしか

ども遂に戦死す宮内式部左衛門も亦然り云々と見えたとぞ是此役

なり

(注)伊集院甚吉と猿渡肥前守か楯籠る隅州財部城……竜伯公財部を攻め

給んと自ら御馬を出せ給ひ……山田越前入道利安軍大將を承りて……

讃良某鉄砲を放て是を射るにあやまたず石見が真中を射通しければ

……寄手に吉田大藏清家平田仁左衛門尉宮内治郎等打死す……忽ち

古井の原上の草葉の露と消給ふこそ痛はしけれ(二卷本)。城兵富山

石見イニ瀬戸ト云二百人ヲ従へ郷ヶ迫ニ打テ出……城方一手ノ將重信越後

(『庄内陣記』)忠真が援軍として重信、富山を派遣したこと、重信が五百人で古井原に出陣したこと、讃良が三百人で日光神山に待ち伏せしてゐたこと、平田が朝功を立てたことは庄内軍記に載せない。

花平營 慶長四年庄内の乱に貫明公龍虎城を攻められし時公の御營址な

りといへり舊記にも此役貫明公諸軍を將て城を攻め玉ひしと載せる

なり然れども前條に所謂貫明公より松齡公へ遣さる御書翰に財部口

へ人数を出せしに云云の文を見れば親から御征伐ありし辭に非ず暫

時御巡檢ありしならん歟

(注)庄内軍記に載せない。

高旗ヶ野 慶長四年前條の役御旗を立られし所なりといふ

(注)庄内軍記に載せない。

黒棚壘 是亦前條同時我裨將山田越前守有信の陣所なりといふ古井原の

邊を眼下に見る

(注)庄内軍記に載せない。

郷ヶ迫 事蹟龍虎城に見ゆ

古井原 同右

(注)右二項、前出。

平田三五郎墓 古井原荷込坂の上にあり墓側に一古松あり墓面に平田三

五郎慶長四年十六歳戦死と銘し月日を記さず庄内軍記等に三五郎は

姿容秀麗にして美少年の名高く吉田大藏清家と好み深かりしが清家

と同じく敵に向ひけるに清家先に戦死し其臣佐藤兵衛武住といふ者

宮之城 同四年八月廿六日北郷左衛門督時久入道一雲舊領都城を轉じて當邑に移封せられ家臣五百三拾人を牽ひ當城に移りて宮之城と改む慶長元年二月三日時久病死す同五年其孫北郷長千代丸封を都城に復す

(注)相隨者僅ニ五百三十余人召具(『庄内軍記』。但し、『庄内軍記』以下では異なる)。同月廿六日に祁答院にそ着にける(二卷本)。時久の死は庄内軍記に出ない。

卷之三十二

國分

隼人城 文祿三年甲午豊太閤石田三成に命じ我薩隅日の田を丈量す九月十四日大口郷より初まる三成大音新介及黒川左近等數人を遣し其事を領す貫明公伊集院忠棟を遣し命を聴く四年乙未二月廿九日丈完

(注)文祿三年秋秀吉公薩隅日三州ノ田畔經略ヲ可被正トテ石田治部少輔三成其事業ヲ司り檢地竿取奉行トシテ田中信濃守黒川左近將監其外五十余人下向アリ九月十四日大口之地ヨリ檢地竿始アル……同四年二月廿九日經略帳簿悉ク成就セシムル間(『庄内陣記』)。この時忠棟が遣されたことは庄内軍記に載せない。

卷之三十五

敷根

薬師堂 慶長四年庄内伊集院忠眞を御征伐の時兵士此堂に集り各其志を述て文句を前後左右の板壁等に題しける其内平田三五郎宗次は姿容

秀麗にして美少年の名高かりしが年十六にて従軍し此堂に來りしに衆人既に題書して其板壁の低き處は書すべき隙なかりければ家丁に棒持せられて其最高の所に自詠の和歌を題しける其歌に云
かき置は片見ともなる筆の跡

我は何くの土となるらん

かくて宗次は庄内の役に戦死しける其板壁は衆兵の題書長く残りし故本府俠少年の徒遠路を歴て來り見る者多かりしとぞ就中て平田宗次が題詠を見る老少となく皆感泣を催しけるとかや

(注)件の二人首途して財部へ赴く時辻堂に趙遙して平田三五郎宗次吉田大藏清家共に庄内一戦の旅に赴くと堂の柱に書付けこそ(二卷本だけ)。

財部

大河原山 慶長四年三月伊集院忠眞此山に獵して止宿す時に一女都城より輿に乗じて來り幸侃伏見にて被誅の事を告ぐ忠眞驚駭して急に帰り軍議をなせしとぞ

(注)同(三)月幸侃力嫡子伊集院源次郎忠真……財部大川原山ニテ関狩ス……則早馬ヲ以忠真ニ告事急也(『庄内軍記』)。女性が輿に乗つて來たことは庄内軍記に載せない。

日光神社 慶長四年庄内の役に當社加護ありとて翌年三月十三日貫明公當社へ詣ふて玉ふ

(注)庄内軍記に載せない。

に移し封ず三万七千石時に三州の諸邑主移封あり忠棟當城に居る移封以後僅に六年に

及び慶長四年忠棟陰謀發覺し三月九日慈眼公忠棟を城州伏見邸に誅す忠棟が嗣子源次郎忠眞諸臣を集め評議し迺ち兵を擧て叛す十二の

壘を列て是を守る十二壘とは財部恒吉末吉梅北梶山勝岡山名高城志和池野之美谷山田安永是なり軍兵凡八千人此時貫明公

國分富隈に在り諸將に命し兵を集め四近の城を守て是に備へ庄内魚

鹽の路を絶つ四月東照烈祖慈眼公を遣して國に就き忠眞が亂を靖め

しむ二公軍を發て忠眞を討ち忠眞が諸城を攻め處々に戰て是を破る

北郷氏其郷導となり七月烈祖山口直友を遣して慈眼公を慰勞し且忠

眞を招降す忠眞聴かず十二月直友歸報す既にして烈祖復直友をして

庄内に遣す五年正月直友烈祖の旨を奉じ忠眞を諭して降らしむ又我

二公をして赦さしむ時に忠眞諸城既に多く下り庄内日に蹙る二月廿

九日諸城を以て降る忠眞に穎娃一萬石を賜ふ其後忠眞を帖佐に移さる既にして忠眞復叛を謀る其事發覺し七年八月忠眞を野尻に誅す三月北郷長千代丸忠能に都城安永高城山之口勝岡梶山梅北七

城を賜ひ既にして十一月復山田野々美谷志和池三城を賜ひ凡十城合

て四万一千石餘於是祁答院より庄内に復へる

割注に引用があるので、『三國名勝圖會』の編著者は庄内軍記を或いは

座右に置いてゐたのかも知れない。右の記事中、北郷忠能に乱後七城が

与えられ、後に更に三城が加えられたということは都城島津家蔵『庄内

軍記』から見られる。又、忠棟が北郷氏領を得る為に先ず石田三成に謀

ったということ、忠棟の都城移封に当たって旧本郷領の外に数箇所が加

えられたこと、貫明公義久が国分富隈に居城してゐたこと、七月に山口

直友が忠眞に降伏を勧めたこと、文禄五年十二月に直友が再び仲介役を

勧めるべく都城に下向したと、忠眞が穎娃から帖佐へと移封されたこ

と等は二巻本『庄内軍記』に初めてみられる内容である。一方、文中

の数値はそれぞれ諸本と微妙に異なり、僅かに忠能の祁答院領三万七千

石が『庄内軍記』『庄内陣記』に一致するに過ぎない。猶、大閤檢地以前

北郷氏領を三万六千余石と号してゐたこと、義久が庄内への魚塩の路を

絶ったこと、文禄五年正月に直友が再度和平の交渉に這入ったこと等は

ついに庄内軍記に載らなかつた内容である。

右のように、『三國名勝圖會』の纏めは、庄内軍記の二巻本から見られ

る内容を取り込んで、『薩藩名勝志』に比べてかなり具体的なものとなつ

てゐる。

次に庄内の乱関係の記事を巻の順に挙げて、庄内軍記との関係を見て

行くことにする。

卷之八

伊集院

地蹟合記△麥生田城 慶長四年己亥の歲慈眼公庄内叛臣伊集院源次郎忠

眞御征伐の役兼持軍功あり

(注)庄内軍記に載せない。

卷之十八

宮之城

吉十二所に砦を構へ亡父の讐を報ぬと欲す公庄内に出馬ありて忠真^(ママ)を征し給ふ兵革歳を越へ忠真降参す公庄内の地を北郷次郎忠能に賜ひ都城に移る^{忠能は時久の嫡孫初名長千代丸と称す後讀岐守と改む}

極めて一般的な纏め方で、初期本の都城島津家藏本『庄内軍記』でもここにあるような事柄は全て記載してゐる。

次に庄内の乱関係の記事を巻の順に挙げてみる。

卷之十二

恒吉

恒吉古城 地頭假屋上の山なり日輪城と名付伊集院源二郎忠真逆意の時

伊集院宗左衛門此城に籠城すといへり

(注)隅州恒吉之城……城主伊集院宗左衛門を初(『庄内軍記』)。

卷之十七

山之口

山之口古城 其後慶長四年庄内の内寇に堀を浚ふし柵を構へ今は景清の

縄張ともいひかたかるへしとそ

(注)庄内軍記に載せない。

卷之十八

飯野

白鳥山権現 又慶長五年正月廿一日慈眼公田壹百四拾余石を寄附して神

領となし永世丁役を除かしめ給ふこれ前年日州庄内の役に公の誓願

あるによつてなり

(注)庄内軍記に載せない。

僅かに右の三項であるが、これは伝承が少いという訳ではなく、むしろ、このようなものにも三箇所出てくるという方向で受け取るべきかと思う(編集の方針を考えた時)。

二

『三國名勝圖會』は、島津斉興が『薩藩名勝志』には遺漏が多いとして、橋口兼古を総裁として編纂させたものであるが、完成したのは天保十四(一八四三)年、五代秀堯が総裁の時であつた。

『三國名勝圖會』でも巻の五十九の「都城之二」の「都城」の項に『薩藩名勝志』の場合と同じく、庄内の乱の経緯が記されてゐる。その内容は方針のとおり、より詳しいものになつてゐる。

文禄四年先是北郷氏安永山田志和池野之美谷高城山之口勝岡梶山梅北末吉財部恒吉永吉^{此永吉は大崎の内と見ゆ}内之浦を領す號して三万六千餘石と號す豊大閣の命にて丈量を經し後定て六万八千餘石とす^{丈量の事は國分伊集院右衛門大夫忠棟法號幸侃北郷氏の邑を得んと欲し竊に石田三成と謀る三成太閤に言す是に至て忠棟を以て北郷氏の所領に數所を加へて領せしむ合て八万三石餘}

^{按に天正十五年五月廿五日豊關白朱記書松齡公に命して伊集院忠棟に肝付一郡を興へらる又古代薩州地頭帳吉利御靈大明神棟札に云天正十五年十一月廿六日本願主伊集院右重張を徒して吉利領主とす古代隅州地頭帳鹿屋地頭六人伊集院忠棟其中に在り庄内軍記文禄四年伊集院忠棟鹿屋門大夫忠棟當地頭日置淡路守久盛又云吉利伊集院幸侃私邑たり小北郷長千代丸忠能を祁答院屋より都城に徙る蓋し忠棟永吉に食て鹿屋地頭となるといふ}

江戸時代末期の地誌に見る庄内の乱

——庄内軍記との関わり 等——

橋 口 晋 作

慶長四（一五九九）年から五年にかけて現在の都城市を中心とする地方で、後の太守家久島津忠恒と義弟伊集院忠真が戦った所謂庄内の乱の合戦記が初めて纏められた時点は、鹿児島県立図書館蔵『日州庄内軍記』^{（注一）}

端書きの、北郷家臣藤原重昌、阿倍[？]氏安正、釈役氏秀政の三氏が乱の全貌を明らかにしようと、数々の資料を鋭意蒐集した延宝四（一六七六）

年にまで遡る。但し、この時点も、この記事を載せる『日州庄内軍記』

が目録を有ち、本文も章段分けされる等整った姿をしてゐるのに対し、

これとかなり近い本文を有ちながら、目録もなく、続け書きで「右一卷

庄内衆大塚源右衛門高城籠城陣中之日々記庄内軍之聞書ト云一卷所写之

也」という奥書きのある都城島津家蔵本の『庄内軍記』が他にあったり

する^{（注二）}ので、ある程度の留保を付けて置かなければならない。そこから、

筆者の見解では明和（一七六四―七二）以降の成立と考えられる玉里文^{（注三）}

庫蔵の零本『庄内陣記』まで、この合戦記は数回の改訂を経て行く。こ

のことは、江戸時代、少くとも百五十年余に亘って庄内の乱の記録や記

憶がこの合戦記と関りながら生きてゐたことを物語る。そこで、筆者は、一方で、この合戦記の改訂の契機ともなる衆庶の記憶の力を具体的に見るべく、江戸時代の地誌（残念ながら、末期以前のものはない）に記された庄内の乱関係の記事を抜き出して、目を通してみたい。

猶、地誌の記事の後に、庄内軍記諸本での掲出の具合を、最も早いと考えられる記事で注した。従って、特にことわりがなければ注された内容はその本以降、記載され続けてゐることになる。又、『庄内軍記』、『日州庄内軍記』、『莊内軍記』は豊臣秀吉の島津征伐を記すが、その関係の記事は大方割愛した。

一

『薩藩名勝志』は本田親孚が島津重豪の命を受けて領内を探訪して纏めたものを、平山武毅が文化三（一八〇八）年八月に完成させたものである。規模が大きく、歴史の古い所が挙げられてゐて、残念ながら庄内の乱関係の記事は少い。

巻の十七の「都城」地区「都城舊趾」の項に庄内の乱の経緯が次のように纏められてゐる。

文禄四年伊集院右衛門太夫忠棟謀計によて義久九代の孫左衛門尉時久城を去て薩州祁答院宮之城に移る忠棟に庄内を賜ふ忠棟此城をもて居城とし凡八万餘石の主となり權勢日に恣なりしに六年を経て慶長四年陰謀露顯し邦君慈眼公忠棟を誅し給ふ忠棟嫡子源次郎忠眞都城に楯籠り安永山田志和地野々美谷高城山之口勝岡梶山梅北末吉恒